

岐阜県教販通信

No.0029

GIKYOHAN TIMES

2023 年 9 月発行

『若者の読書離れ』というウソ

当社は岐阜県の全小中高校に 100 年以上教科書を供給し続けてきまして 2021 年度に、「スクールイーライブラリー」進呈させて頂きました。電子図書よって新しい読書の機会を与えることで深い学びにつながる一助となればと思います。本年度は県教委の後援の下 7 月 20 日～23 日まで児童図書展示会を当社で行いました。第三回本の日読書感想文コンクールも今年も開催します。何卒宜しくお願い致します。



寺脇 研 氏

寺脇研(てらわき けん、1952 年～)元文部官僚。星槎大学大学院教育学研究科客員教授。官僚時代には文部省 NO.1 の論客でならし、ゆとり教育の広報を担った。福岡県福岡市出身

今年 6 月に出版された刺激的なタイトルの本が話題を呼んでいる。

結論から言おう。事実は全くその通りなのだ。学校図書館の充実・発展および青少年の読書振興を目的とした公益社団法人「全国学校図書館協議会」が昔から行ってきた「学校読書調査」に、はっきり証明されている。

昨年 67 回目を迎え、70 年近く前から調査してきた経過を追うと、たしかに、1980 年代から 90 年代にかけては、「読書離れ」と呼ばれても仕方ないほどの状況だった。90 年代後半には、平均読書冊数が最低、不読率（本を 1 冊も読まない者の割合）が最高を記録している。

しかし、2000 年代以降を見ると前者は増加、後者は減少と、子どもの読書量は、いわゆる「V 字回復」の一途なのである。小学生の増え方がめざましく、中学生も微増している。高校生は横ばい常態だが、総じて考えれば、「読書離れ」どころか、真逆の傾向だ。

それもそのはず、小学校で 2002 年から導入された新しい思想による指導要領（「ゆとり教育」と呼ばれた）は、「自ら学び、自ら考える」の目標を掲げていた。それまでの、教えられたことを理解し身につける受け身だけの学びに加え、子ども自身が学びたいことを見つけ、それを追究していく探求的学習を広げて行こうというのだ。

探求的に学ぶとすれば、誰かに教えてもらうのを待つのではなく、自らの手で学ぶためのヒントを獲得していく必要がある。その最も身近な手段が、本なのだ。子どもたちが読書に親しむ方向へ近づくのは当然だろう。小学生の読書量が増えているとすれば、それは、先生方の努力によって探求的学習が根付き、子どもたちの知的好奇心を盛んに刺激してくれているからに違いない。

「朝の読書運動」の効果も大きいだろう。1988 年に千葉県私立高校で始まったこの運動は、①みんなでやる ②毎日やる ③好きな本でよい ④ただ読むだけ の 4 原則に価値がある。記録や感想文を求めないとする④が

子どもたちの参加を容易にしたのも事実だが、ことに③に重要な意味があった。大人が勧める本でなく、自分で読みたいと思うものを選べる「選択の自由」の尊重である。

ちょうどその頃、今日の「個別最適化」「主体的、対話的で深い学び」の源流となる「生涯学習」の考え方が、87 年の臨時教育審議会答申で打ち出されたばかりだった。画一的に受け身の学習を行う明治以来の教育に、学習者である子どもたちが学びを選択する余地を取り入れ、主体的に学ぶ意欲を作っていくというのだ。

「朝の読書運動」は、まさにその方向を示していた。その頃、文部省(当時)で「生涯学習」の意識を広める職務に従事していたわたしは、いち早くこれに注目した。そして、02 年指導要領の実施を目前に控えた 01 年に文部科学省が発表した「21 世紀教育新生プラン」では、この運動を主要な柱の一つに位置づけ、学校の図書購入費を増額したのである。

2020 年度の調査によれば、岐阜県内でも、小学校 327 校(全体の 88%)、中学校 143 校(76%)、高校 55 校(68%)で行われている状況はご承知の通りだ。各学校や先生方のご努力に感謝したい。先般、岐阜市で初めて行われた児童図書展示会の場でも、わたしが審査委員である岐阜県教販主催の読書感想文コンクールの審査をしても、子どもたちの読書への関心が確実に高まっているのを感じる。

やれ多忙な“ブラック労働”だとか、なり手の少ない職業だとか、学校や教師の価値を貶めるような言説が横行する昨今ではあるものの、岐阜県の、また日本の学校現場は着実に深化しているのである。その成果を、一人でも多くの保護者や地域住民の皆さんに知ってもらいたいものだ。